

突然、捕物太鼓が聞える。孫右衛門は二人を一間へ押しやり自分だけは後へ残つて「此の裏道の小河を渡り、藪を抜ければ御所街道、早うく」と、手を振つて指圖をし、やがて自分もその後から一間へ入る。屋體が、少し下手へ引かれると、大勢の組子を連れた小頭が出て、梅川忠兵衛と名乗るものをからめとらんと、下手横幕へ追うて入る。

「孫右衛門飛び立つ嬉しさ」で、屋體の上手後から孫右衛門が姿を見せて、下手を窺ひ乍ら船底に下り、「裏道見やつて」で、上手二人の去つた後を見送り「オ、さうぢやく」と、トンと足拍子を入れて右手を振り翳し、「切株で足つくな」トンと、右足を踏出し、爪先を立てるやうにして左手を翳し「と、屈かぬ……」で、力なく手を下し「聲も」もう二人の姿は見えなくなつて了つて放心の態で、ボンヤリ少し仰向け氣味の顔を、尙も上手に向けたまゝ、兩手を全く力を抜いて下げ、タドくと正面となり「子を思ふ」で、徐々に下手向きとなつてガツクリ首を垂れ「平沙が……」少し腰を屈めてタドくと下手へ進み「善知鳥」で、屋體の前に捨てられた杖を拾つて正面となると「血の涙」となり、トンくとよろけて、右の杖で支へ左手もそれに重ねて、左足を踏み出した形で堪え「永き親子の」で首をひねつて上手へ向き直り「別れには」で、屋體が一層下手に引かれると、上手奥に雪の野道が開ける。杖をひき乍ら上手へ進んだ孫右衛門は「や

すかたならで」で立止つて、身體を傾け乍ら上手を見やり、足許の切株に左足をかけるのが「安き……」で、杖を切株の上に立て、兩手をかけて伸び上り「氣も」力が餘つて前へのめらうとして杖を離し、左足を正面へ踏み下すのが、柵の頭「涙々の」で、羽織の兩襟をとつて頭から引冠り、切株に腰を落し、兩手を震はせ乍ら、面を伏せると、雪しきりに降りかゝる内に幕。（九月六日見物）

第四百十三號正誤表

頁		誤		正	
三	下	一六	獨自體	獨自體	
七	下	七	放つた。これは	放つたこれは	
ク	ク	一一	似たところ	似たところ	
九	下	一二	上手く	上手へ	
一二	下	七	が自棄	か自棄	
一五	上	一	のびまち	のびちどまり	
四三	上	九	大鷗尊	大鷗尊	
ク	中	一五	崇	崇	
四四	上	一三	極暑	極暑	
ク	中	一四	蚊張	蚊張	
四八	三	七	牢	牢	